

構成体の中にのみ生起したという事実は、なんらおどろくべきことはない。他の大きな地域が、各種の社会的・経済的・政治的理由によって発展の道程上のいくつかの点で停滞したとしても、それはマルクス主義となんら矛盾しない。マルクス主義と矛盾するのは、後者を、あらかじめ、あたえられたワク組みの中に押しこもうとすることである。実際、マルクスとエンゲルスが執筆して以後の、人類学、有史前時代、歴史時代初期の分野でのぼう大な諸発見によっても、われわれの考えをいちぢるしく変える必要がないとすれば、それこそおどろくべきことであろう。

社会発展法則は仮説の域を出ない

ロバート・ブラウニング
(Robert Browning)

本誌七月号に出たR・ジャーディンの論文は、以前にしばしば論ぜられたことのある問題を取上げたものである。マルクスの『経済学批判』にある「生産のアジア的、古代的、封建的、近代ブルジョワ的様式」という公式と、それ以後の階級社会の三区分とのあいだには、くいちがいがある。このくいちがいは、マルクス主義思想家たちの言説を「永遠の姿の下に」見る人びとをおどろかせば、そのほかに用はない。しかし、このくいちがいから過去に多くの不毛な論争が生じ、その論争のなかで、マルクスのいうアジア的生産様式とはどのような意味なのか、この点にかんして、わずかしかなない同じ歴史的事実のたくわえを援護とすることじつけの解釈が、ますますひどくなっていた。この種のうっとおしいジュースイットの文献のちかごろの出現は、元マルクス主義者——あるいは異端のマルクス主義者——ウィットフォールの著『東洋の専制制度』（一九五九年）である。

われわれは今日での先輩たちよりも、はるかに多くの資料をもっており、またわれわれの回答しだいではマルクス主義全体が存亡のわか

れ道に立つとの感なしに——わかれ道に立てばいいと思っている人もあるが——この種の問題を論じることができる。一般にアジアには、そして特殊的には中国・インドには、奴隷社会ということができれば有効であるような——この有効という語が重要である——一段階が存在したかどうか、この問題はもともとアジア史の専門家の問題である。同志S・A・ダンゲは、その回答を英国の獄中で三カ月間にしあげようとしたが、そんなてっとりばよい切り口上の答えが大きな価値をもつような問題ではない（『インドの原始共產制から奴隷制まで』ボンベイ、一九四九年）。新たな資料があらわれ、考察がますます深まるにつれて、論争は長期にわたるであろう。

「支配的生産形態」

本論の筆者は、あいにく、アジア問題に特別の知識をもちあわせていない。ただギリシア、ローマ時代を研究した経験があるので、これがR・ジャーディンの議論をどの方向に発展あるいは修正しうるかについて、いくらかの示唆をあたえてくれる。第一に「支配的生産形態」という概念は、慎重な定式化を必要とする。人口の大多数が、あるいはきわめて数の多い少数部分にせよ、その少数部分が、特定の生産形態にひきいられているとの意味に解することはできない。一例を近代にとれば、一九一四年の世界全体の支配的生産形態は資本主義だということに反対の人はまずあるまい。それでも賃労働者あるいは雇用者として資本主義生産関係のなかに直接ふくまれているのは、やっと一億そこそこであった。奴隷社会を構成するには幾人の奴隷を必要とするかというこの問題は、かようにまったく意味がない。昨年（一九六〇）十二月モスクワでひらかれたソヴェト古代歴史学者会議（『古代史報』一九六一年第二号所報）でも、ギリシア・ローマの奴隷制の討論で、まさにこの点を強調していたのは興味深い。

ここから第二の論点が出てくる。R・ジャーディンは「全体の基礎である農業が（インド・中国で）主として奴隷によっておこなわれた

ことを示す証拠があるか、どうか」と問うている(二三三頁)。このような証拠が手もとに出そろっている地域や時代は、おそらくあるまい。新石器時代から人類の多数は生存のための農耕をいとなんできたし、今日もなお農業は人類の大多数の生業となつてゐるであらう。それは耕作者とその家族との生命を維持するに要する点を越すこときわめて少量を生産する原始的な生産様式である。そのわずかなばかりの剰余価値、ないしその一部は、支配階級によってさまざまの仕方では——その仕方は限定することがしばしば必ずかしく、また大きな剰余価値をもたらす生産部門の諸関係からいくつかの色合いをかりてきてもいるが——そういった仕方では、かきあつめられるであらう。ギリシア人はこのような従属農民を半奴隷としていたが、近代の学者も西欧封建社会の各種の農奴を、あるいは今日の資本主義世界の小作農をも、おなじくそのような半奴隷とみてきた。社会の性質を決定するのは、高い剰余価値を生産する生産部門の生産関係である。この生産関係は人口のきわめて小さな部分を直接包括しているにすぎなくても政治的文化的上部構造を大きく決定する。

第三に、前資本主義社会にかんする統計で利用するにたるものは普遍存在しない。そのため近代世界のとりあつかいになれた歴史家は、迷い子になつたように感じ、一見もっともらしい数字なら、どんなにして得られたかをよく調べもしないでそれに飛びつく傾きがある。ギリシアの奴隷についてR・ジャーディンの引用している「約五〇%」という数字は、あまり高率にすぎで、かなりの広さの地域では、どのどんな時代にも当てはまらないであらう。グッドリッチ教授の中国の奴隷一%という数字も、反対方向における同じ程度にひどい誇張であらう。発見される数字は、ある特定時代の特定経営にかんする偶然的なデータである。これらの数字がどの程度に代表的であるかを決めるのは、なかなかデリケートなことがらといえる。一気呵成の量的一般化への誘惑は避けねばならない。いづれにせよ、こういった数字はみながみなまで重要だとはいえないであらう。

奴隷制の種々の形態

第四に、こんにち英国で奴隷を見るにはローマの法律家の目を通さないわけにはいかないが、マルクス・エンゲルスの時代はなおさうであつた。しかしこういう奴隷制は、経済的カテゴリーであつて法的カテゴリーではなく、またローマの法律家がねりあげた精密な定義体系に合致しなくても一人の人間が奴隷であることに少しのさしつかえもない。この意味でマルクス主義が欧州中心に考えてきたことには十分の歴史的理由があつた。ローマ人にとってはローマ社会のそとがわにはいるカテゴリーの人びとが奴隷であるか自由人であるかを決めることは、むずかしかつた。ローマ人の目を通して生産関係を見るかぎり、われわれにとつてはなおいさうむずかしい。法的身分、社会的地位などの背後にある経済的現実を深く観察せねばならない。アジア社会にかんするマルクス主義の論争では、このことが必ずしも一貫してなされなかつた。

第五に、こんにちわれわれはあまりにも狭すぎる西欧の見地からものとを見ないようにとつとめながら、後へたおれようとしている。この努力は以前におかした世界史のひずみを訂正するうえに必要である。しかし欧州は青銅時代以降、特別の立場にあつたこと、資本主義が十分な発展をとげ社会主義を生みおとしたのは欧州においてであり、しかも欧州においてだけだつたこと、このことも忘れないようにしよう。G・チャイルドは遺稿(「ヨーロッパ社会の前身」一九五八年)のなかで、欧州の「特権的」地位の基礎となつた諸原因をあげている。百世代前のわが祖先は、大きな幸運つづきのために歴史の「急行列車」に乗りこむことができた。われわれはそのことを鼻高にならないうでみとめたいのである。

最後に、われわれの定義をいかにするどくし、新たな資料をいかに積みあげても、階級社会の諸段階にかんする問題の回答は、物理学その他の帰納的諸科学の法則と同じように、仮設の域をでない。これら

の法則は、きわめて高度の蓋然性に達し、人生指針となるであろうが、新たな事実が現れて打破されるかもしれない、また常にいつそう洗練された精密な定式化を受ける可能性をふくんでいる。したがってこれらの法則を、数学のような演繹的な科学——あるいは神学——の法則にたいすると同じ目で見ないよう心がけねばならない。

社会制度発展の多様性

ビル・テイト

(Bill Tait)

本誌七月号の前記表題の寄稿は、奴隷制が社会の歴史的発展のなかの本質的な一つの経済的段階であるとの見解に反論をくわえ、このような見解は欧州の古典文明だけを眼中におきすぎた結果だと述べている。

しかし同志ジャーディンの所論は、ローマ帝国崩壊のち奴隷制が発展してきたと言外に語っていることになる。もう一つだけ先例を引くと、故G・チャイルドはイタリアでは早くも紀元後三世紀に「マナー」制とともに封建制がはじまったことを指摘し、そのころにはすでに奴隷経済の長きにわたる崩壊がはじまっていたという。そうだとすれば、封建制は奴隷制にとってかわるべきもので奴隷経済の内部で成長した。この点、資本主義が封建制の内部で成長し封建制にとってかわるのと同じだということになるらしい。少くともイタリアでは封建制は奴隷制の崩壊にさいして青空からふってきたのではなく、紀元四七六年のローマ崩壊に先立つ二世紀前から発展しつづけてきた。

また、新興ブルジョワ階級は封建階級の権力を打倒したが、これに反して新興封建階級と奴隷所有者とのあいだには重大な衝突のあった記録が史上にみとめられない。むしろ奴隷所有者は奴隷経済の崩壊がすすめばすすむほど封建制をいっそう経済的なもの、経済的に必要なものとして、これをますます取入れていったようである。

東ローマ帝国（ビザンチン）の推移もこれに似ている。ビザンチンは一千年近いあいだトルコ族の手に落ちなかったが、J・リンゼイの著書によると、封建制はすでに根底では紀元八世紀ころまでにビザンチンの経済制度として奴隷制にとってかわっていたという。ビザンチンにはなんらかの革命があったという記録はないし、蛮族その他なんびとによる国家顛覆もなかった。ただ一つ偶像破壊運動の形をとった階級衝突の記録はあるが、これは封建制への突入に先立っていたのではなく、むしろその後を受けて生じたもので、封建階級と奴隷所有者階級の衝突という映像とは一致しない。

奴隷制はどこでも原始共同体制のつぎに現れたかといえ、これも明かではない。近年クノソス・ミケナイにかんする知識はきわめて大きくなったが、紀元前五世紀から十二世紀のあいだに原始共同社会がゆたかなクレタ島文明をささえていたとは考えにくい。この文明は一部は封建制に、一部は商業に依存していたとみられる。ホーマーは紀元前七百年ころ集成であってミケネイ文明を反映しているが、これも原始共同社会や奴隷社会をえがきだしているのではない。ここでも封建社会が写しだされている。

要するに古典世界では封建制が奴隷制に先行したこともあり、その後につづいて現れたこともある。

そうだとすると、奴隷制以前の封建制と奴隷制以後の封建制とのあいだに、なにか固有のちがいがあったのであろうか、あるいは近代資本主義が奴隷制以後の封建制の内部から出てきたばあいと、その外部から他の諸要因にもとづいて出てきたばあいとが事実上あったのだろうか。

ベオウルフの世界もホーマーの世界と同じく封建制であった。けれどもわれわれの知るかぎりでは北欧諸民族は奴隷制の段階を通らなかつたしローマ化も受けなかった。

原始共同体制のつぎになんらかの封建制があらわれたと考え、また世界のある地域にかぎって奴隷制段階が起ったと考える——そのよう